

長岡市内遺跡発掘調査報告書

藤 ヶ 森 遺 跡
五 斗 田 遺 跡
三 ノ 輪 遺 跡
本 途 地 区
土 手 端 地 区

1997

長岡市教育委員会

序

長岡市教育委員会は、昭和62年度から長岡市内に所在する遺跡の確認調査を行ってきました。目的は、土砂採取計画、ゴルフ場開発、圃場整備事業などの各種開発と、遺跡（埋蔵文化財）保護についての協議を行うための資料作りです。

今年度に確認調査を行った亀崎町藤ヶ森・五斗田遺跡は担い手育成基盤整備事業計画と調整を行う資料の作成、五反田町三ノ輪遺跡は土地区画整理事業の道路建設に伴う調査、日越町の本途地区は医療関連施設計画、渡沢町の土手端地区は変電所建設計画に伴う遺跡の所在調査でした。藤ヶ森遺跡では、弥生時代の墳丘墓を、五斗田遺跡では古墳時代の集落跡を確認し、三ノ輪遺跡では縄文時代中期の堅穴住居跡を調査しました。本途地区と土手端地区は、調査の結果事業地内には遺跡が所在しないことが判明しました。藤ヶ森の墳丘墓は、新潟県でも例が少ないものであり、新潟県の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

長岡市教育委員会は、これからも遺跡の確認調査を継続し、埋蔵文化財の保護について遺漏の無いように努めるつもりです。

最後になりましたが、新潟県教育庁文化行政課、新潟県長岡農地事務所、県営ほ場整備事業山北第三地区協議会、関原東部土地区画整理組合、東北電力株式会社、医療法人立川メデカルセンター、山北土地改良区をはじめ、調査に御指導・御協力を賜りました関係各位に心からお礼を申し上げます。

平成9年3月25日

長岡市教育委員会
教育長 大西厚生

例 言

- 1 本書は、平成8年度に実施した長岡市内遺跡発掘調査の記録である。
- 2 調査には、関原土地区画整理組合及び医療法人立川メデカルセンターから、バックホーなどの提供を受けた。
- 3 調査は、長岡市教育委員会が調査主体となり、駒形敏朗が文化財保護法上の発掘担当者として行った。
- 4 本書の作成は、駒形と調査員の鳥居美栄が整理事業員とともに、全体を駒形がまとめた。
- 5 発掘調査の出土品・記録写真及び図面等は、長岡市教育委員会が保管している。

目 次

1 亀崎地区の調査	1
(1) 藤ヶ森遺跡	1
(2) 五斗田遺跡	6
2 三ノ輪遺跡	9
3 本途地区の調査	14
4 土手端地区の調査	17
5 おわりに	20
調査体制	20

1 亀崎地区の調査 (第1図～第8図)

調査に至るまで 本調査のきっかけは、県営山北第三地区（担い手育成基盤整備）事業が計画されたことによる。計画地には、横山遺跡と藤ヶ森遺跡の2遺跡があり、事業主体の新潟県長岡農地事務所などと協議を行い、平成8年度に遺跡の確認調査を実施し、その結果に基づいて具体的な遺跡の保存方法について検討することにした。なお、既に遺跡全体の発掘調査が完了している横山遺跡は除いた。

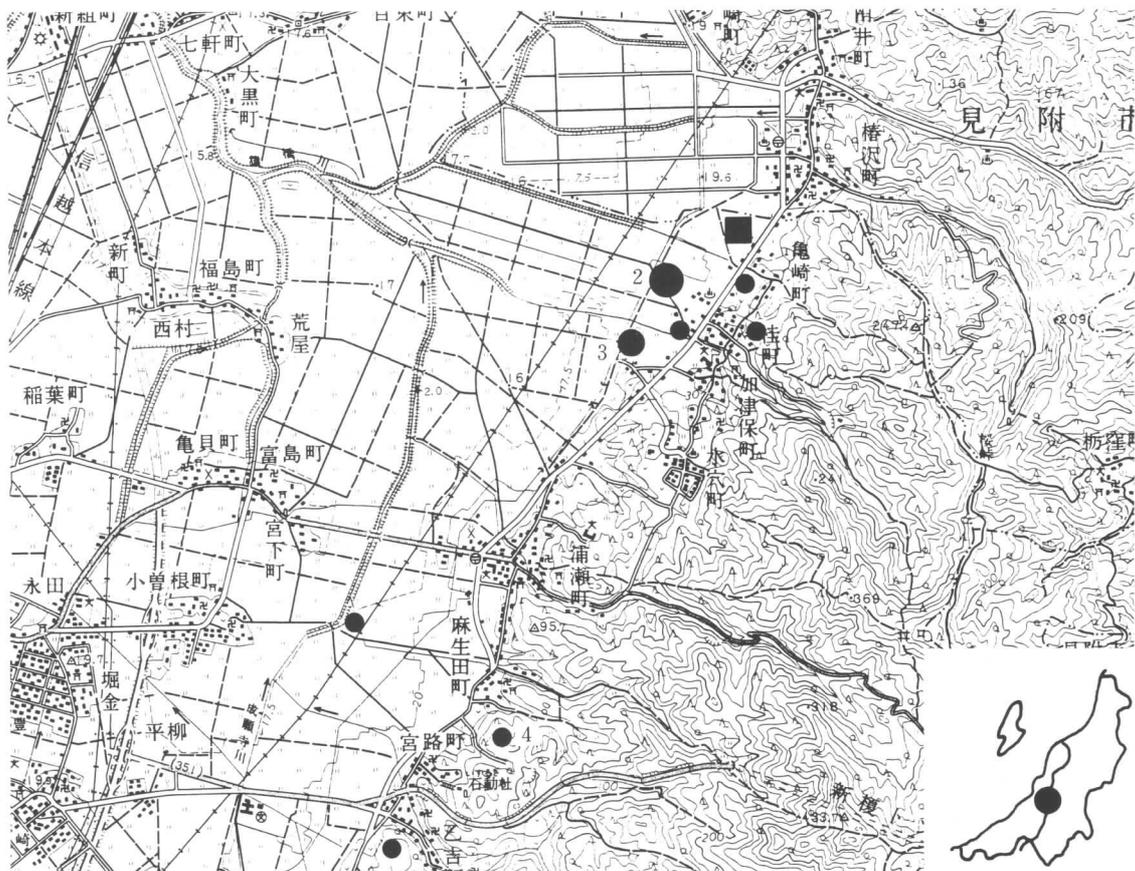
(1) 藤ヶ森遺跡

所在地 長岡市亀崎町字藤ヶ森

環境 (第1図・第3図・第4図) 東山丘陵から西の沖積地に突き出た尾根の先端部に位置する。尾根は、標高約31mの山林部と、標高約26mの平坦部（地目は畑）に分けられる。なお、山林の尾根の東側は、道路が横切っている。周辺には弥生時代の横山遺跡と原山遺跡などと、麻生田古墳群がある。

調査 (4月16日～4月24日) 2×4mの発掘グリットを全体で25ヶ所（第4図）設け、面積約200㎡を発掘した。環濠集落跡の可能性を考慮して、丘陵の裾部にもグリッドを設けた。発掘はすべて人力で行った。

調査の結果 山林部の尾根上で弥生時代後期終末の墳丘墓が2基確認された。平坦面では、3Gで弥生土器が5点出土ただけで、他には遺構・遺物はなかった。他に石鏃が3点採集されている。また、13Gで北越戊辰戦争で使われたと見られる銃弾が2点出土（第6図12・13）した。



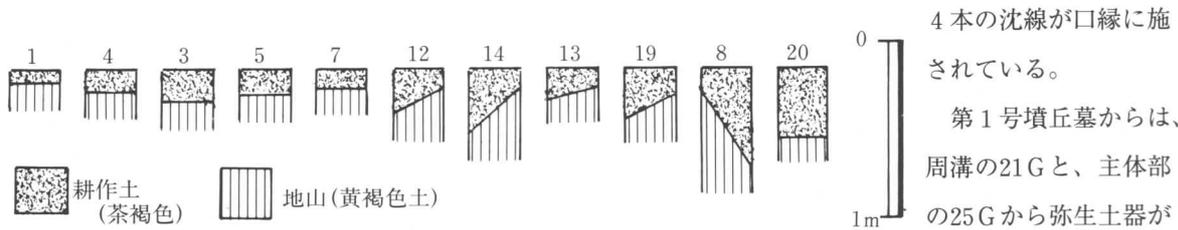
第1図 藤ヶ森遺跡・五斗田遺跡位置図及び弥生時代遺跡群並びに古墳群 (1/50000 長岡)
藤ヶ森・五斗田遺跡 (■) 横山遺跡 (2) 原山遺跡 (3) 麻生田古墳群 (4)

土層序 (第2図) 第2図の土層図は、平坦面での土層序である。薄いところで5cm、厚いところで35cmの耕作土の下が地山の黄褐色土である。遺物の包含層は見られなかった。

墳丘墓 (第5図) 幅約25mの尾根上に2基の墳丘墓が並んで位置していた。第1号墳丘墓の外形は、杉の植林などで崩れていた。残存する外形からは、墳頂部で一辺約5~7m、高さは西側で約2mである。東及び北側は傾斜面に続いている。第1号の墳頂部で、4基の主体部と思われる落ち込みを確認する。周溝は、西側の21Gで確認された。確認した範囲での状況から第2号と一部で共有するのではないかとと思われる。主体部の確認位置と周溝から弥生後期末の土器が出土した。

第2号は、南側が畑の造成で崩されていた。残存部から、一辺約6mの方形を呈するものと思われる。第2号の発掘は行わず、形状から墳丘墓と判断したものである。

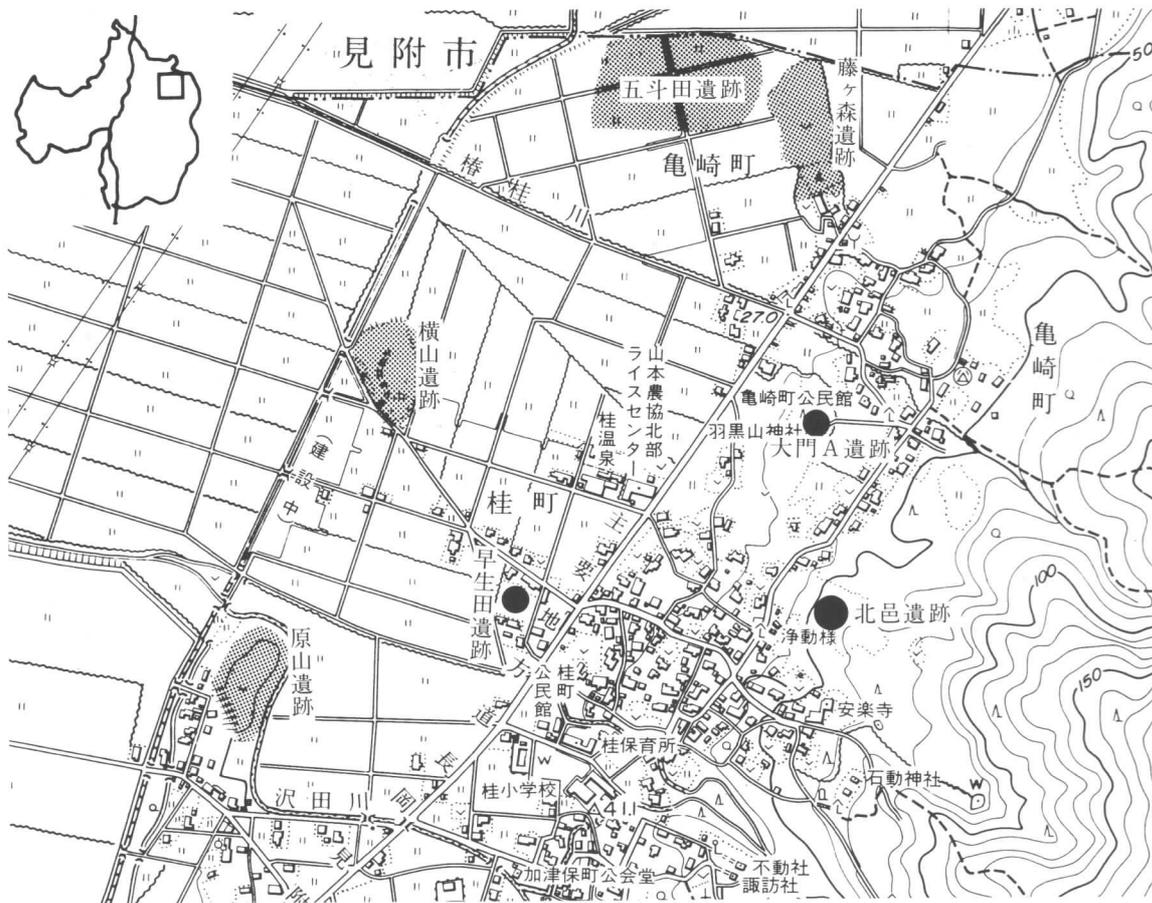
遺物 (第6図) 平坦部での遺物の多くは採集品で、調査グリッドから出土した遺物は、弥生土器の小さい破片である。石鏃は、凸基有茎鏃2点(1・2)と、平基無茎鏃の未成品1点(3)が採集されている。4は、小松式の甕の口縁部の破片で、採集品である。表面はかなり摩滅している。5も採集品で、



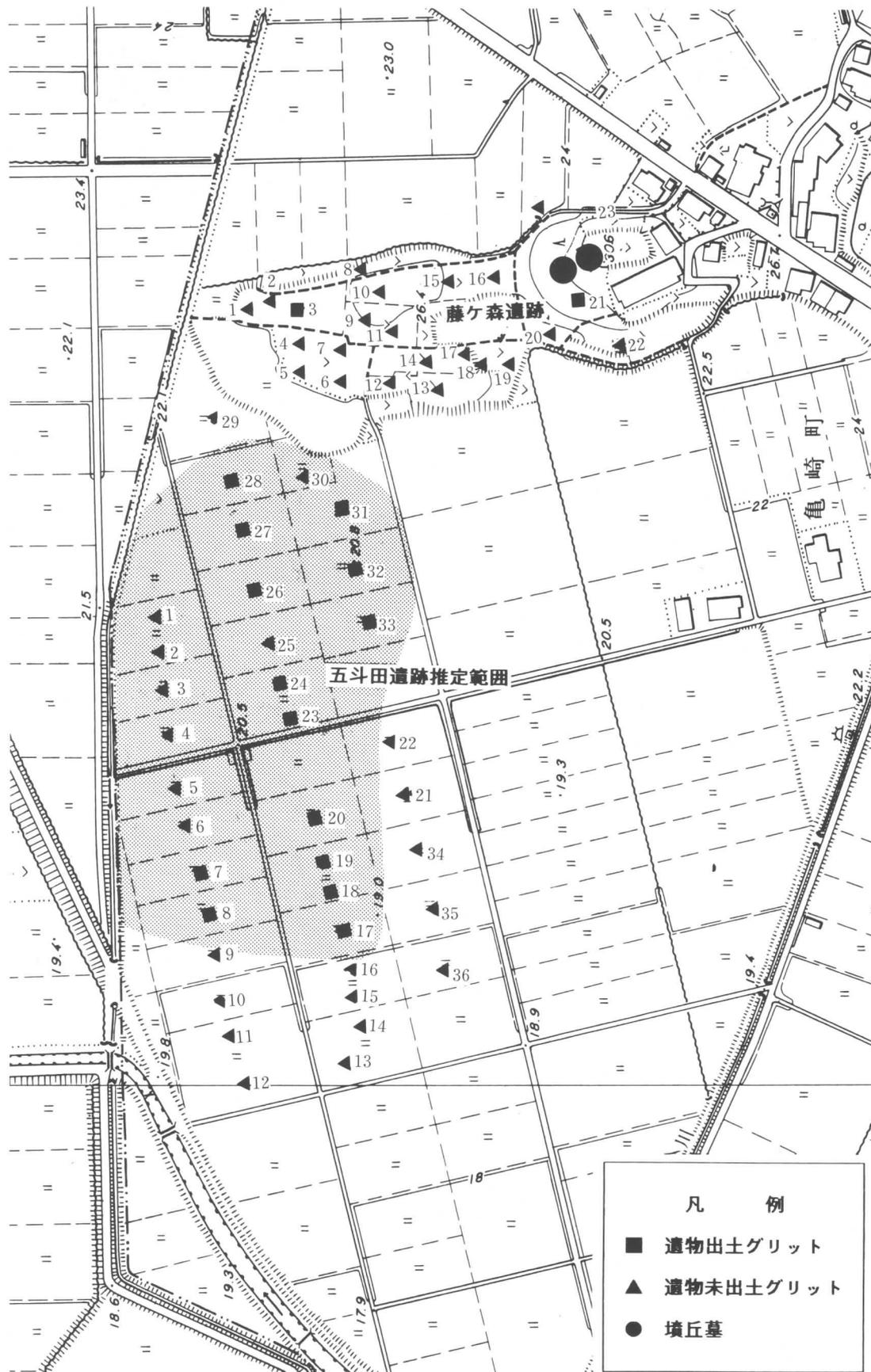
第2図 藤ヶ森遺跡土層柱状図

4本の沈線が口縁に施されている。

第1号墳丘墓からは、周溝の21Gと、主体部の25Gから弥生土器が出土した。6は主体部



第3図 藤ヶ森遺跡・五斗田遺跡周辺の地形及び弥生時代遺跡群 (1/10000)

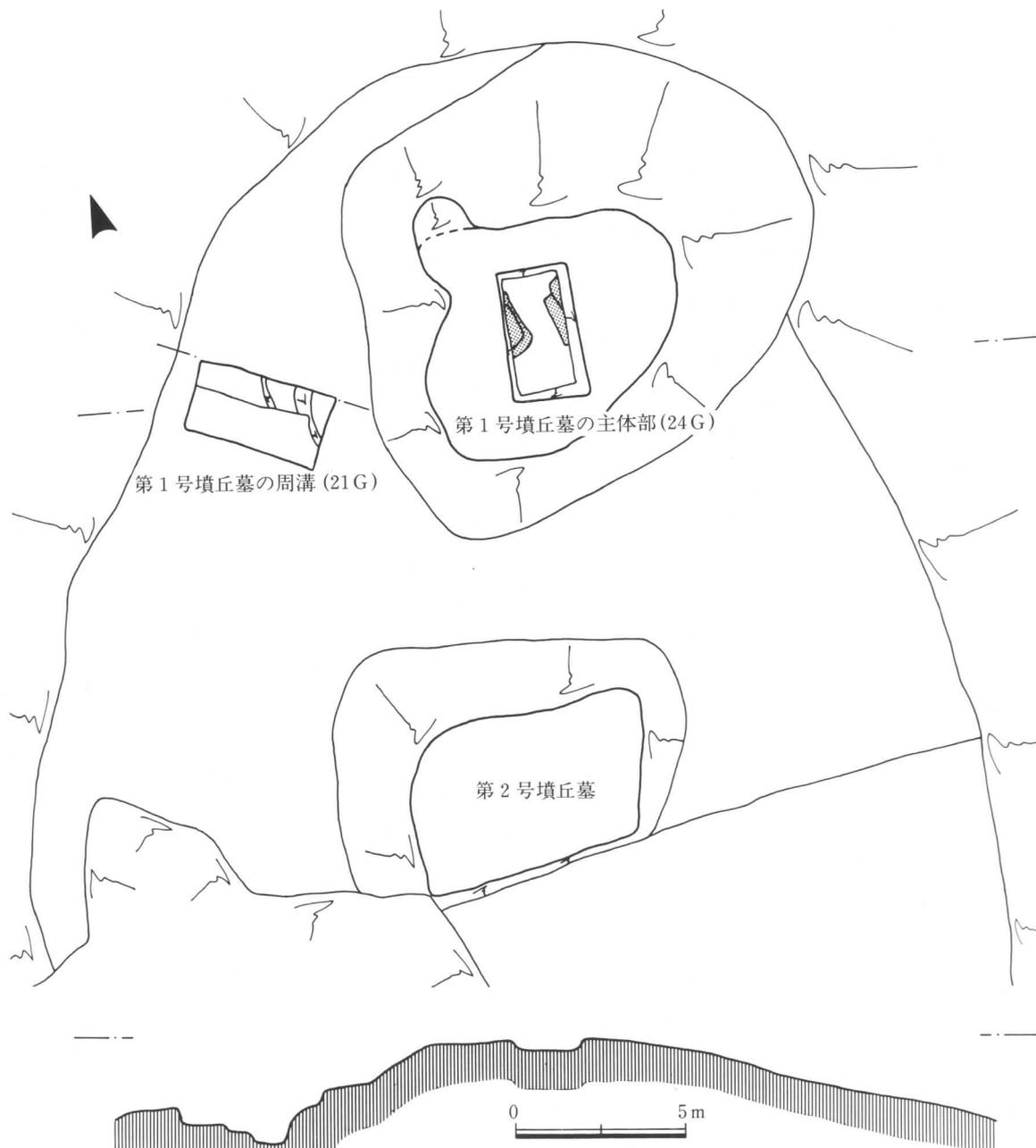


第4図 藤ヶ森遺跡・五斗田遺跡調査グリット図 (1/2500)

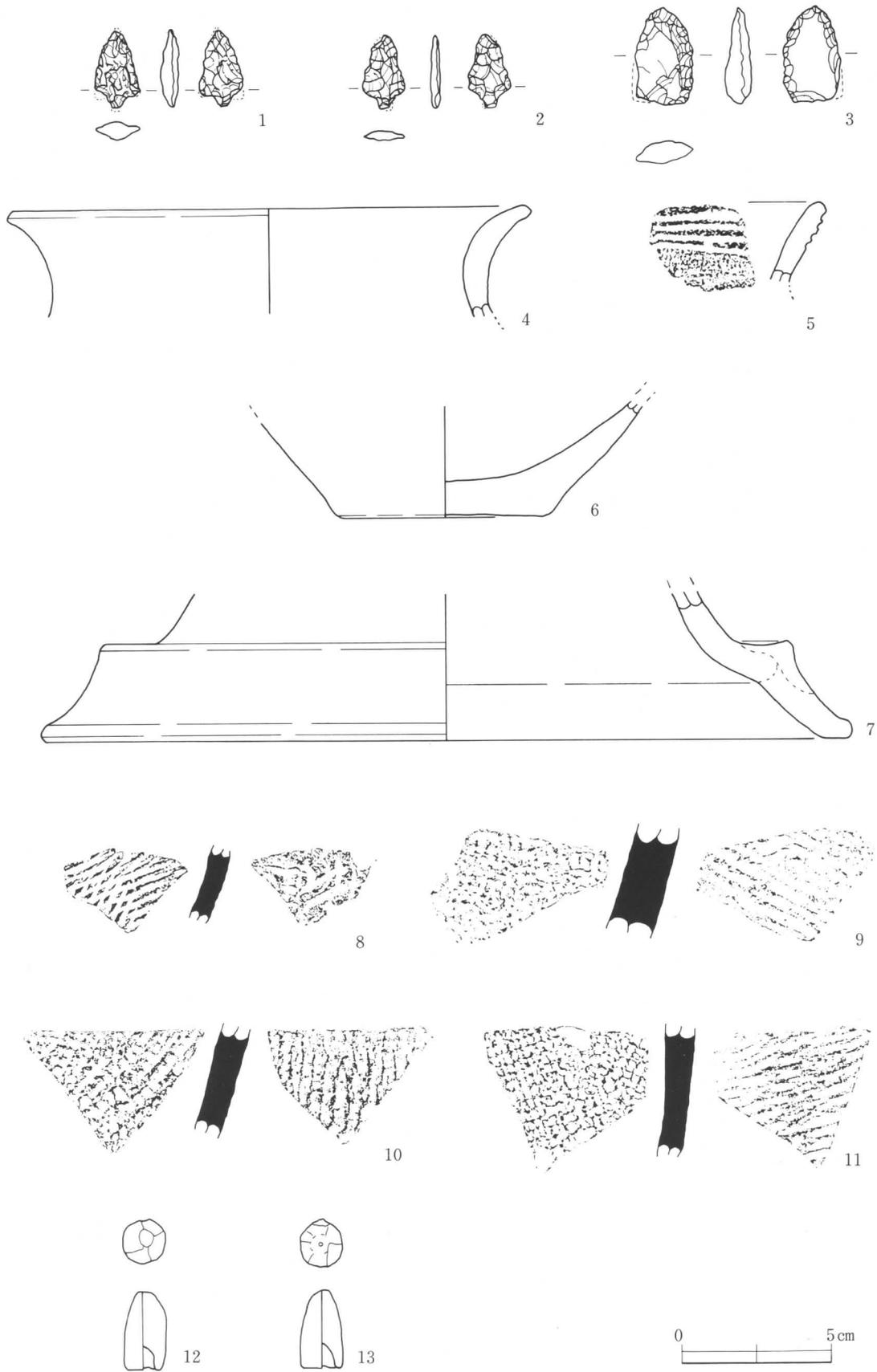
の確認面出土の甕の底部で、表面が摩滅しており、調整痕は確認できない。周溝からは、大形器台の脚部（7）が出土している。段の部分は、脚部と裾部との接合部の外面に貼り付けた粘土で作られ、内外面ともにヨコナデによってつなぎ目が消されている。墳丘墓出土の土器は、弥生時代後期終末の所産である。

その他に、須恵器の甕（8～11）が遺跡周辺（五斗田遺跡か？）で採集されている。内外面に叩き目痕がある。8は外面が縄目の叩き目で、内面は同心円の叩き目をヘラで削っている。

まとめ 2基の墳丘墓は、今次調査で初めて確認された。尾根が続いていれば、この他にも存在した可能性がある。周知の遺跡地である平坦部は、ごく少量の弥生土器が出土したほかは、遺構・遺物は発見されなかった。平坦面には墳丘墓の祭祀を行った遺構跡の存在が推測され、事業に伴う発掘調査を行う場合、祭祀遺構の有無を確認することの指導を新潟県文化行政課から受けた。



第5図 藤ヶ森遺跡墳丘墓略測図（1/200）
（網掛け部分は、墳丘墓の主体部＝墓室の確認位置）



第6図 藤ヶ森遺跡出土遺物（1／4）

(2) 五斗田遺跡

所在地 長岡市亀崎町字五斗田

環境 (第1図・第3図・第4図) 藤ヶ森遺跡に近接する沖積地の水田にある。標高は約20mで、見附市との境界付近が最も高く、南及び西に向かって傾斜している。

調査 (10月15日～10月21日) 調査は、土器が採集された地点を中心に、水田1枚に1カ所のグリッドを基本として設定した。グリッドの規模は、バックホーで発掘を行うため、3×4mとした。調査の方法は、バックホーでグリッドを1カ所ずつ発掘し、必要な記録を取った後、直ちに埋め戻した。この発掘方法は、水田工事に精通しているバックホーのオペレーターと、経験豊かな農業従事者の発掘作業員と協議しながら彼らの進言などに基づいて進めた。この方法は、第一義的には発掘したグリッドに水を溜めないことで、確認調査から本発掘調査までの間に行う水田耕作に支障を来さないことを目的としている。なお、発掘したグリッドは合計36グリッド、面積は432㎡である。

調査の結果 14カ所のグリッドで土師器・須恵器などが出土した。遺跡の広がり、土器の分布状況と地形などを考慮して第4図で示した範囲と推定した。なお、推定範囲の南端に当たる31～33Gの南側は、土地所有者の同意が得られなかったため、確認調査の対象から除いた。遺構は確認されなかった。

土層序 (第7図) 土器の包含層は、青灰色砂層あるいはガツボの暗黒色土の上にある灰黒色砂状土である。包含層の状況は、7・8Gが5cmほど、24G付近で20cmほどで、全体的に薄い。なお、1～6Gで包含層が見られないのは、表土下の青砂混じりの黒灰色粘土層を地山面と見誤ったもので、表土上での遺物の分布状況や地形などから包含層は存在するものと推定される。

遺物 (第8図) 五斗田遺跡からは、土師器 (1～4)、須恵器 (5～10・12)、珠洲焼 (11) それに袖カマドの土製支脚 (13) が出土している。土器は小破片で、摩滅が著しく、特に土師器の調整痕はほとんど確認できないほどである。

土師器の器種は、埴 (1)、埴 (2)、坏 (3・4) それに甕である。甕は図化できる破片はない。1の埴と2の埴は、色調が黒く、内面黒色処理が施された可能性があるが、表面が摩滅しているため確認できない。1・2は18Gの出土である。3・4は坏の口縁部で、33Gの3は、摩滅のために調整痕が不明である。4は29G出土で、底面に回転糸切り痕が認められる底部破片である。ロクロの回転方向は、内面の回転ロクロナデの痕跡から右回りと見られる。図示した土師器の時期は、古墳時代後期である。

須恵器は、坏 (5・6)、坏蓋 (7)、それに甕 (8～10・12) がある。5は坏の口縁部で、口唇部内面に回転ヘラケズリがなされている。坏蓋は7G出土で、天井部の外面に左回りの回転ヘラケズリによる調整痕が見られる。8～10は外面に縄目状叩き目が、内面はヘラで叩き目が削られている甕の胴部破片である。5・7～10の坏・甕の時期は、口縁の形態や調整痕から、古墳時代後期の土器と思われる。

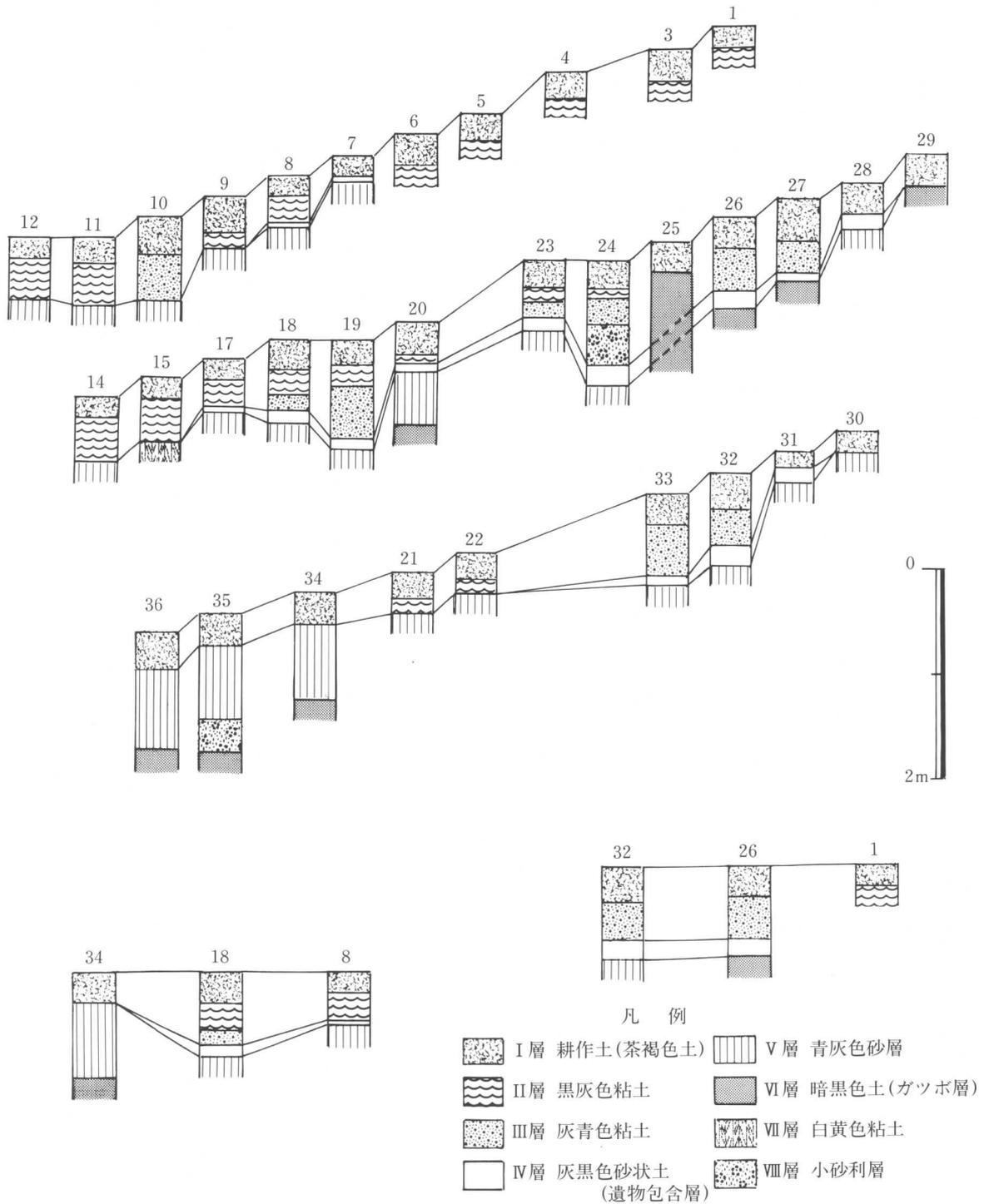
13の袖カマドの土製支脚も、古墳時代後期の所産で、土製支脚の出土から竪穴住居跡の存在が予測される。19G出土である。

6の坏、12の甕は平安時代初めの佐渡小泊産の須恵器である。12は外面が籠目の、内面に同心円の叩き目が施されている。珠洲焼の11は、甕または壺の胴部破片で、外面に綾杉状に条線状叩き目が施され、内面の当て具は礫を用いたものと思われる。

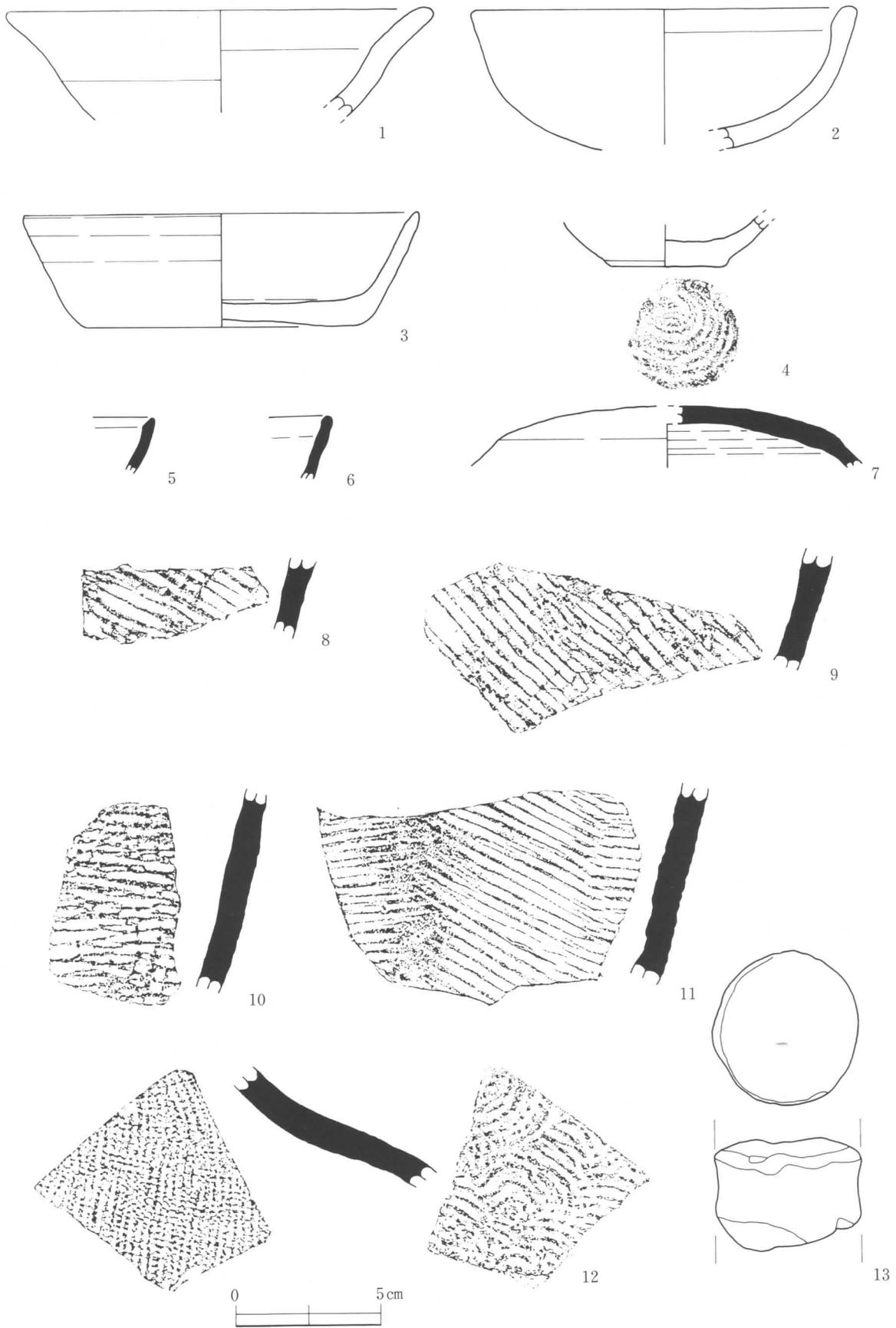
まとめ 五斗田遺跡の確認調査は、事前の現地踏査で土器が採集されているために、遺跡所在の確認と、遺跡の範囲を推定することを目的として実施した。遺構は確認されなかったが、包含層は薄いながらも確認でき、古墳時代、平安時代それに中世の遺跡が存在した可能性がある。中でも土製支脚の出土から、

竪穴住居跡が推定され、古墳時代後期の集落が存在した可能性が高い。五斗田遺跡の推定範囲は、第4図で示したとおりで、推定面積は約2万㎡である。

なお、この地域は、大正末期に起きた栃尾郷大水害で水田の畦畔も流されるなどの被害を受けた。包含層が薄いのは、水害で包含層の一部が流されたことも考えられ、本発掘調査で明らかにしたい。



第7図 五斗田遺跡土層柱状図



第 8 図 五斗田遺跡出土遺物

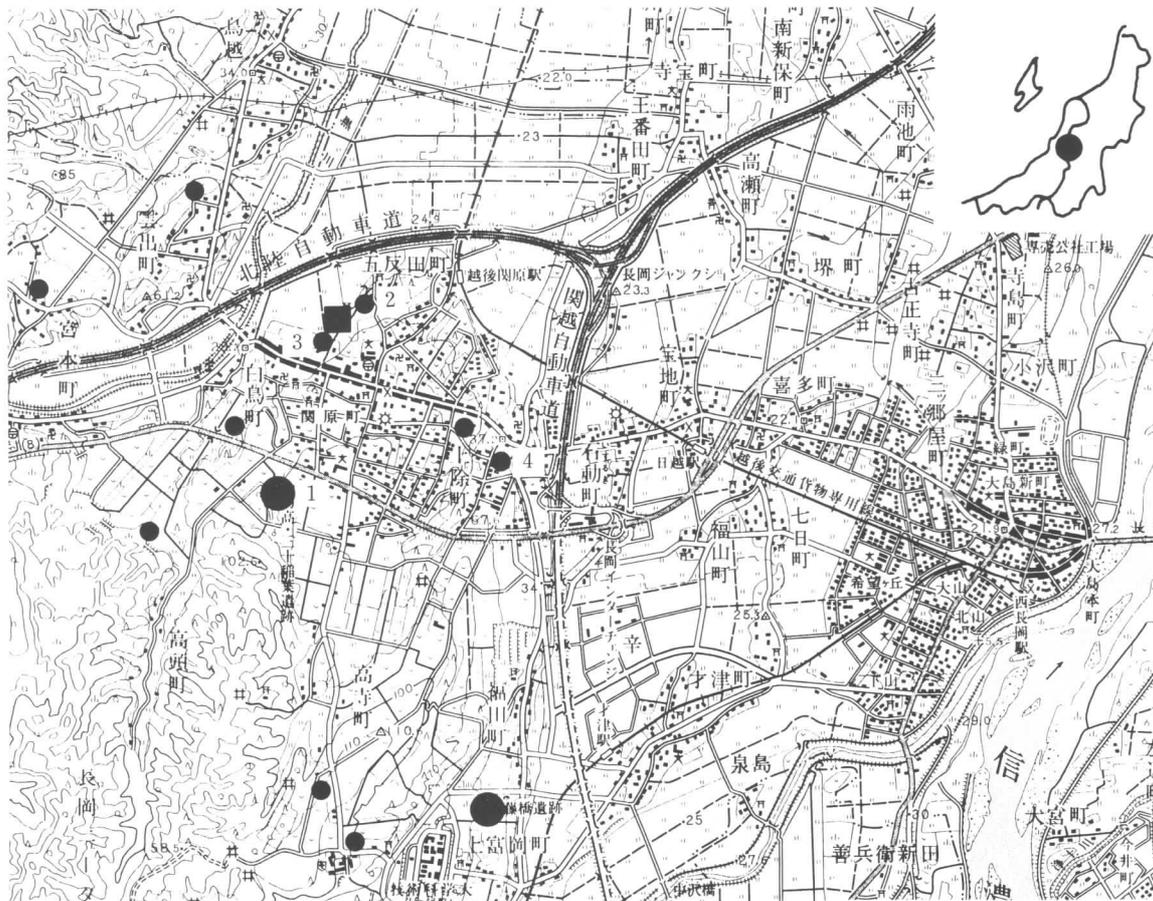
2 三ノ輪遺跡

所在地 長岡市五反田町字三ノ輪

環境 (第9図・第10図) 信濃川左岸の河岸段丘 - 通称関原丘陵の北西側縁辺部に位置する。標高は約33mで、北西に広がる沖積地より約6m高い。現況は畑である。三ノ輪遺跡の近くには縄文中期の石組炉を検出した瓜割遺跡 (駒形敏朗『長岡市内遺跡群発掘調査報告書 - 瓜割遺跡・三ノ輪遺跡・六右エ門清水遺跡・三貫梨遺跡 -』長岡市教育委員会 1991年) があり、南の関原丘陵には馬高遺跡などの縄文中期の集落跡が所在している。

調査に至るまで 三ノ輪遺跡は、平成2年度に実施した関原東部土地区画整理事業地内における遺跡の確認調査で、弥生中期初めの再葬墓が4基検出された以外には、遺構・遺物は検出されなかった (駒形1991年『前掲書』)。このため、宅地の造成や道路の工事などの際には、バックホーなどで表土を発掘し、確認した遺構を発掘するようとの、調査後に新潟県文化行政課から指導があった。今回の発掘調査は、事業の一環の道路工事に伴うもので、事業主体者から重機等の提供を受けて実施したものである。

調査 (9月17日～9月24日) 『コ』状に段丘の縁辺部を巡る幅8mの道路法線内をバックホーで、地山面までの10～15cmほどの表土を発掘する。まず、平成2年度調査の再葬墓の痕跡の穴を確認し、次いで、北西の角で直径約4.4mの竪穴住居跡の落ち込みを確認し、竪穴住居跡の発掘を人力で行う。調査面積は、約1,520㎡である。



第9図 三ノ輪遺跡位置及び周辺の縄文時代中期の遺跡 (1/50000 長岡)

三ノ輪遺跡 (■) 馬高遺跡 (1) 瓜割遺跡 (2) 六右エ門清水遺跡 (3) 南原遺跡 (4)

調査の結果 今次調査で発見された遺構・遺物は、縄文時代中期の竪穴住居跡と住居跡出土の縄文土器と打製石斧それにスクレパーである。再葬墓はもちろん、他に遺構・遺物は検出されなかった。

遺構（第12図） 直径4.4mの円形の竪穴住居跡が1軒発見された。竪穴住居の壁は、確認面（地山面）が東から西へ傾斜しているため、西側は確認できなかった。地床炉が西側に偏って在り、小さいピットが7本、それに東側に浅くて若干大きいピットがあった。7本の小さいピットのうち、深さが30cmほどのP1～P4は規模や位置から竪穴住居の支柱穴と考えられる。浅くて大きいピットの性格は不明である。

遺物（第13図） 遺物は、縄文中期の土器が670点（9,590g、粗製土器に復元できた1個体分の73点を含む）で、打製石斧が1本、スクレパーが1点である。いずれも覆土からの出土である（第12図）。

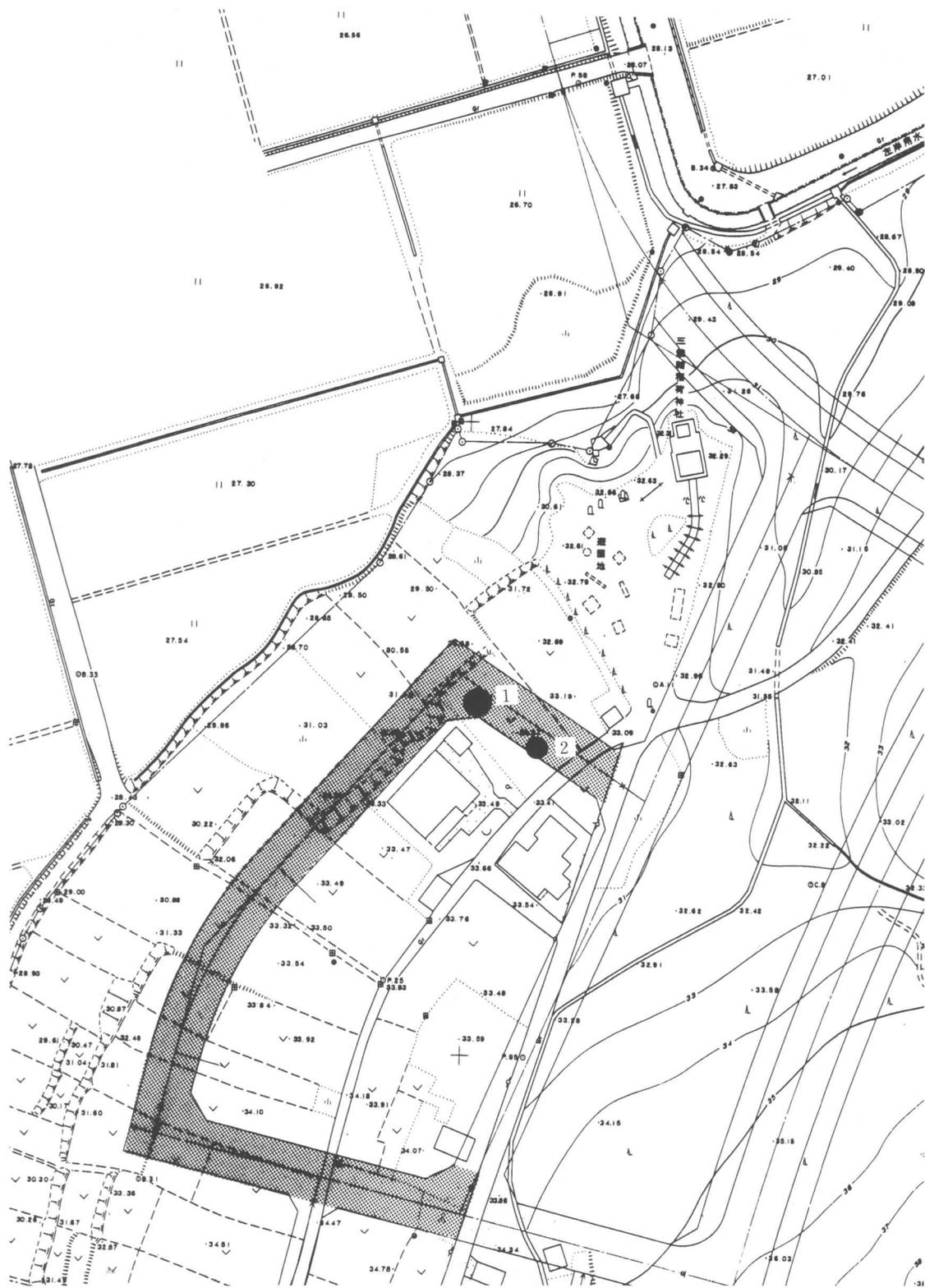
縄文土器は、中期中葉の王冠型土器（1～7・10）と、大木8a式の口縁部破片（8・9）、それに横位若しくは縦位の縄文があるいわゆる粗製土器（11～14）の一群である。王冠型土器は半隆起線で文様が描かれている。1は王冠状の把手で、3は頸部から胴部の大形の破片である。10は王冠型土器の底部破片で、底面に網代痕が観察される。大木8a式の9は、口縁から頸部にかけての破片で、綾杉状の沈線が施されている。8は、半截竹管による文様が描かれた大木8a式土器の胴部破片である。

打製石斧（16）は、刃部が欠損しており、自然面を多く残して石斧としての調整を行っている。スクレパー（15）は、薄い剥片の周囲に両面から打ち欠いて刃部を作り出している。

まとめ 今次調査では再葬墓は確認されず、縄文中期中葉の竪穴住居跡を1軒発掘しただけである。また、表土面での遺物採集調査でも遺物は全く発見されなかった。今次調査は、道路法線内に限られていたが、遺物が採集されないこと及び竪穴住居跡が1軒だけで、しかも岩野原遺跡（駒形敏朗・寺崎裕助・他『岩野原遺跡』長岡市教育委員会 1981年）など、長岡市内で発見されている縄文中期の竪穴住居跡に比べて一回り小さいことから、住居跡は狩猟などの際に使用する一時的な生活の場であった可能性が高い。



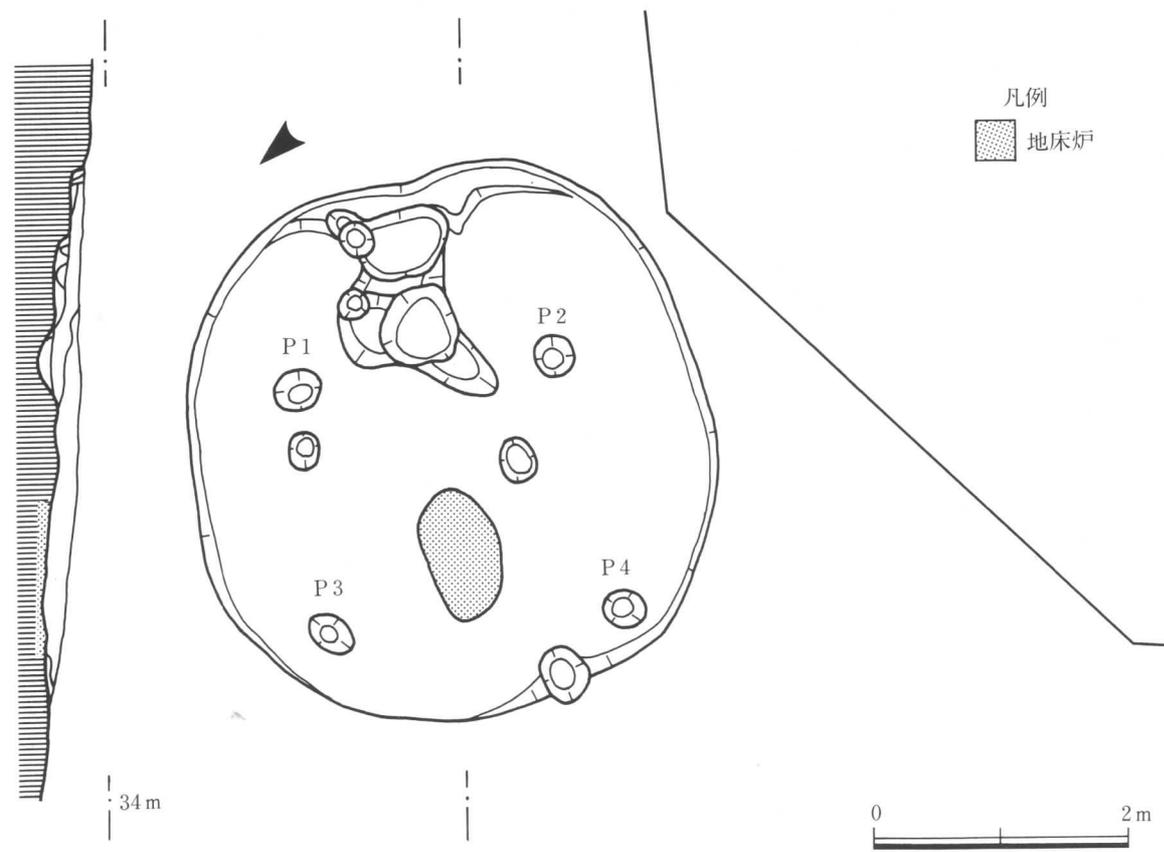
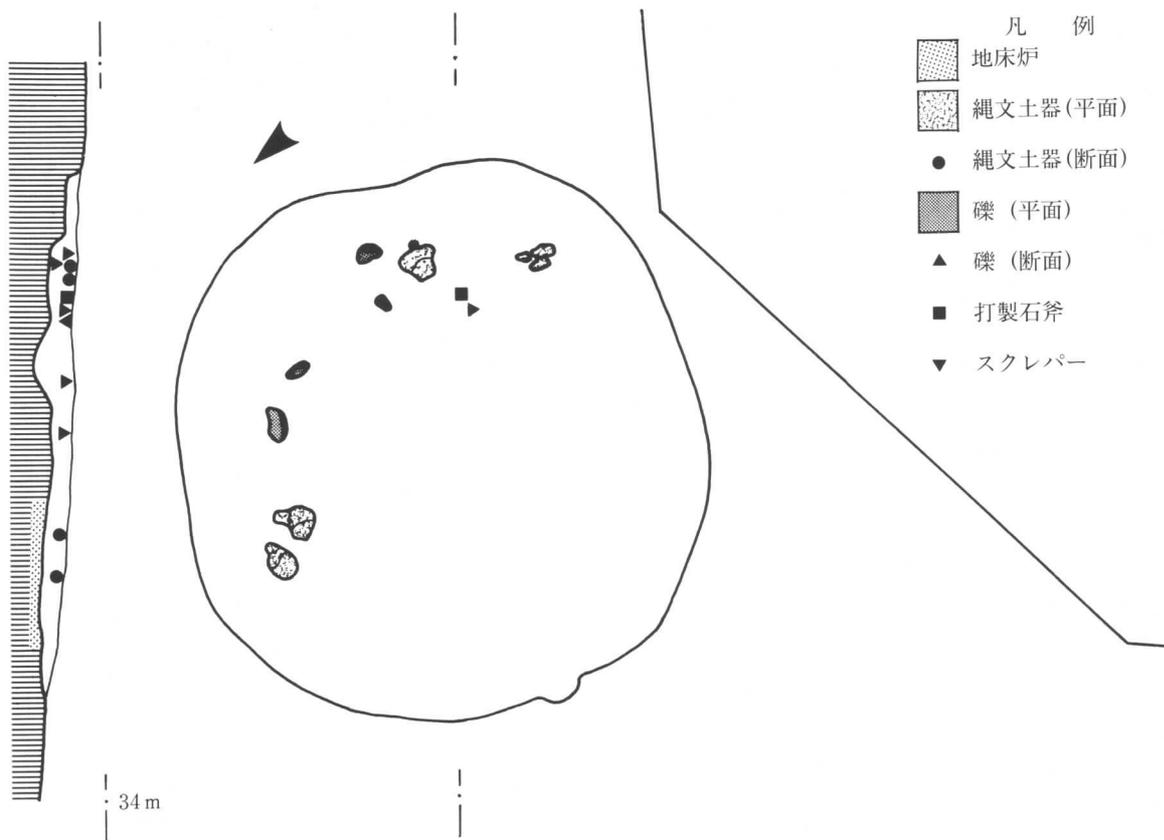
第10図 三ノ輪遺跡周辺の地形図（1/10000）



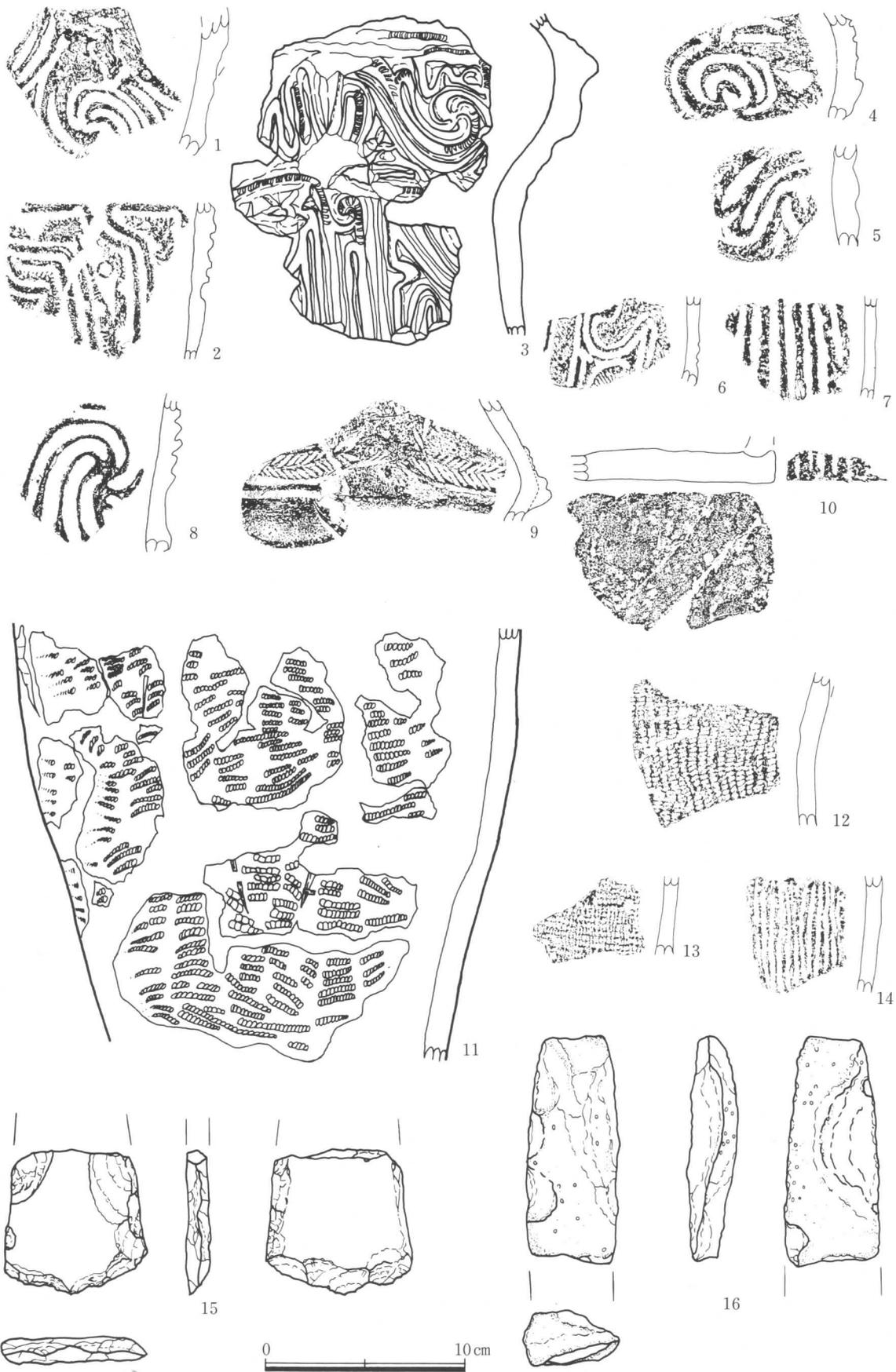
第11図 三ノ輪遺跡発掘調査位置図 (1/1000)

調査対象地 (網掛部分=道路法線内)

竪穴住居跡 (縄文時代中期) 検出位置 (1) 再葬墓 (弥生時代中期) 検出位置 (2)



第12図 三ノ輪遺跡竪穴住居跡遺物出土状況図(上)実測図(下)、S=1/60



第13図 三ノ輪遺跡出土遺物 (1 / 3)

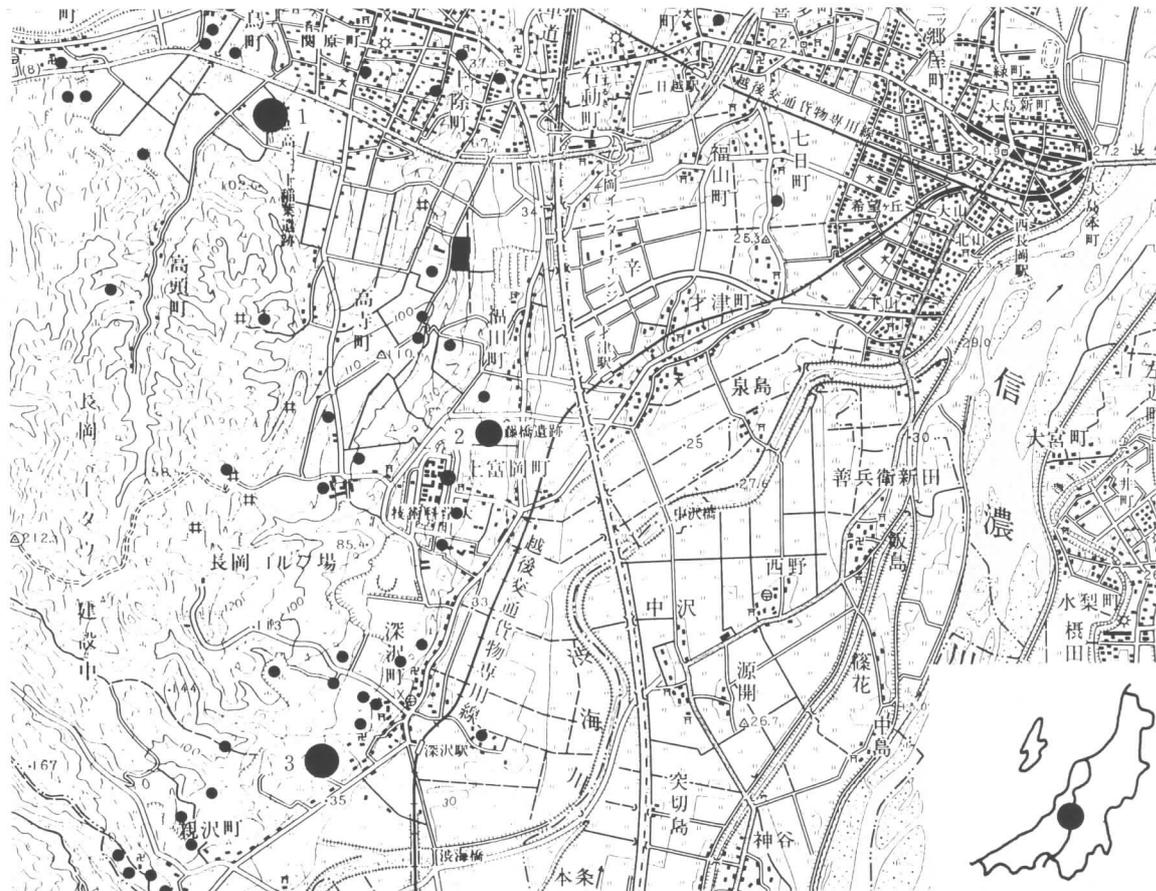
3 本途地区の調査

所在地 長岡市日越町字本途

環境 (第14図～第16図) 調査地は、標高約70mの信濃川左岸の河岸段丘上に位置している。現況は、一部で畑が残っているものの、ほとんどが雑草地になっている。

本調査地の周辺には、旧石器時代の長峰団地西遺跡、縄文時代の日越原遺跡・原遺跡、中世の長峰城跡が所在している。また、半径約2km以内に国指定史跡の馬高・三十稲場遺跡(縄文中期・後期)と藤橋遺跡(縄文晩期)が、南へ3kmのところには縄文中期・後期の岩野原遺跡の地域の拠点的な集落跡があり、その周囲には規模の小さい遺跡が多数ある。このように本調査地を含む信濃川左岸の河岸段丘上には、多数の遺跡-特に縄文時代の遺跡が所在しており、縄文時代においてはこの地域が経済活動を行う場として適していたことを物語っている。

調査に至るまで ロングライフセンターのある上位段丘と、長峰団地のある段丘との間に、医療法人立川メデカルセンターが事業主体となって、リハビリなどを目的にした『悠々健康村』が計画された。計画地には、長峰城跡の一部が含まれているため、事業主体者の代理人と長峰城跡の保存方法について協議を行った。長峰城跡が存在する箇所は、傾斜面であることなどから、計画を立案した当初から掘削等を行わない残地森林として保存する予定であることを確認する。また、協議では、計画地の周辺の段丘上に、旧石器時代から縄文時代の遺跡が存在しており、計画地に未周知の遺跡が存在する可能性が残されているた



第14図 調査地の位置図及び周辺の遺跡群 (1/50000 長岡)

調査対象地 (■) 馬高・三十稲場遺跡 (1) 藤橋遺跡 (2) 岩野原遺跡 (3)

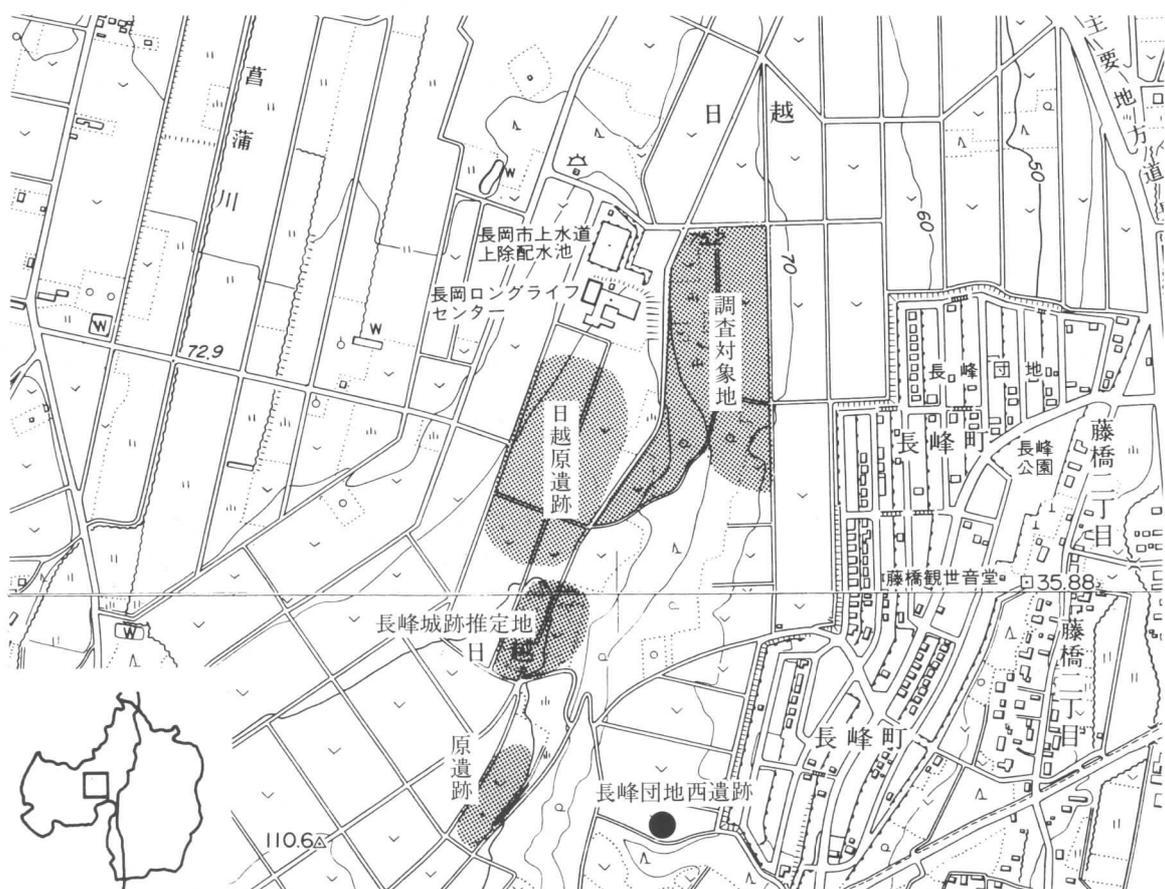
め、遺跡所在の確認調査を実施することなども話し合った。

遺跡所在の確認調査は、悠々健康村第Ⅰ期工事を行う前の昭和63年に第Ⅰ期計画地を対象に、事業者からバックホーなどの提供を受けて実施した。調査は新潟県文化行政課職員の立ち会いの下に行い、遺跡が所在しないことを確認した。今次調査は、第Ⅰ期計画地の北側に計画された第Ⅱ期工事の計画地を対象に行ったものである。

調査（9月11日） 悠々健康村第Ⅱ期計画地を対象とした遺跡所在の確認調査は、第Ⅰ期計画地の調査と同じくバックホーなどの提供を受けて実施した。調査は、20mおきに3×4mの発掘グリッドを設け、バックホーを使って発掘を進め、土層断面の発掘及び地山面での遺構の確認には人力で行った。発掘したグリッドは22カ所、面積は264㎡である（第16図）。

調査の結果 以前に畑であったところは、10～40cmの表土下は地山の黄褐色土になり、埋没沢に当たる箇所は150cmほどで地山面に達する。発掘の結果、22カ所のグリッドからは、遺構・遺物は確認されなかった。また、河原石は、1点も出土しなかった。

まとめ 悠々健康村第Ⅱ期計画地の確認調査では、遺構・遺物が発見されなかった。計画地には遺跡は存在しないと判断される。縄文集落跡の中道や岩野原遺跡の発掘調査で、包含層から多数の河原石が出土することを経験している。それとは対照的に、馬高遺跡の隣接地の発掘調査では、縄文土器が40点出土したが、河原石は1点も出土しなかった。この現象については、馬高遺跡の発掘調査を行って確認しなければならないが、現時点では遺跡の有無の確認についての判断材料の一つになるのではないかと考えている。今後の発掘調査の積み重ねで確認すべき事柄と思う。



第15図 調査地周辺の地形及び遺跡群（1/10000）



第16図 本途地区調査グリット図 (1/2500)

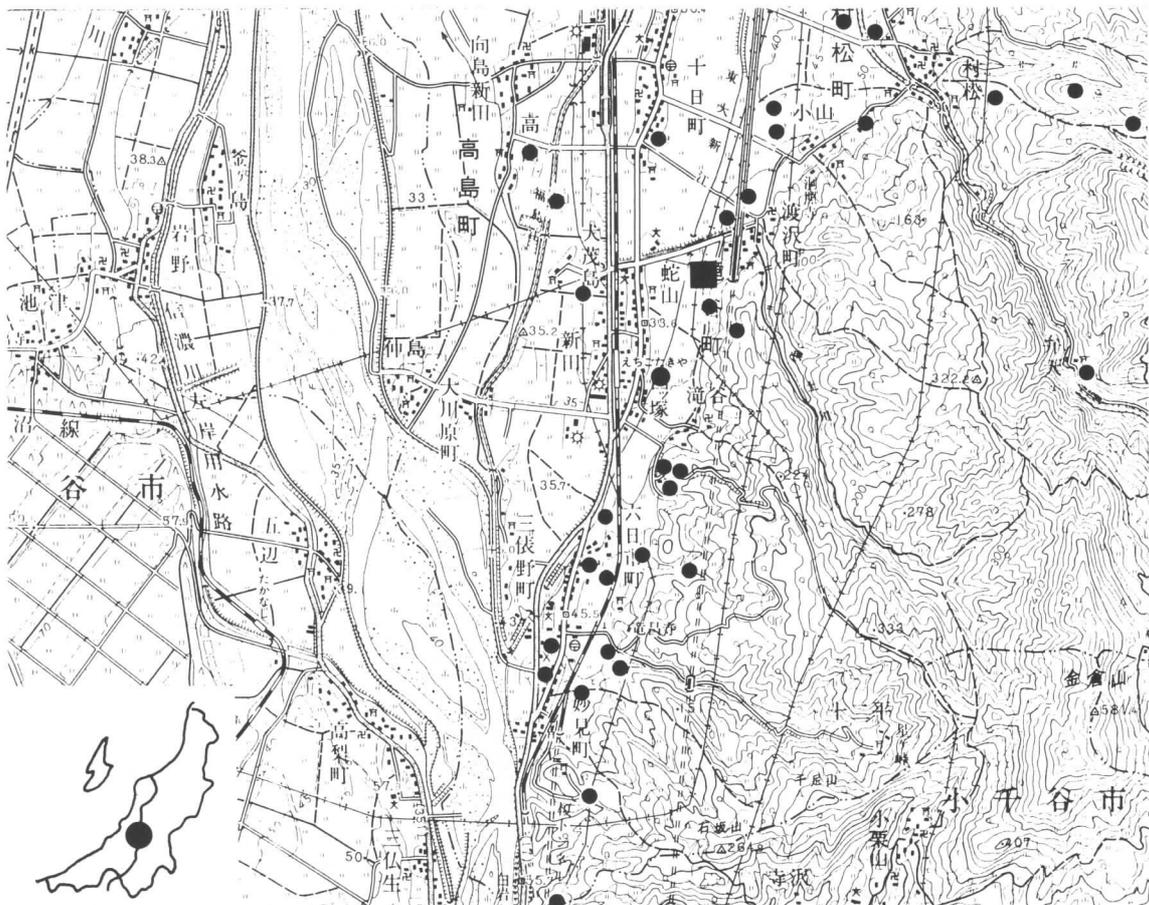
4 土手端地区の調査

所在地 長岡市渡沢町字土手端

環境 (第17図～19図) 調査地のある長岡市の岡南地区は、丘陵と接するように流れていた信濃川が西へ蛇行し、右岸にも新潟平野が広がり始めるところである。調査地は、東の丘陵に接する沖積地に位置する。標高36～37mで、現況は水田である。

調査地の岡南地区には、早田北遺跡(縄文中期・古代)、早田西遺跡(古代)、滝谷前山遺跡(古代)、下ノ坪古銭出土地(中世)、白倉館跡(中世)などの遺跡が多数所在している。特に古代から中世にかけての遺跡が、沖積地に多数確認されている。

調査に至るまで 平成8年度に入って間もなく、長岡市周辺の電力の供給態勢を強化充実する目的で、新たに変電所を建設する計画(事業主体:東北電力株式会社)が持ち上がった。本調査地が変電所建設予定地選ばれたのは、第18図・第19図に見られるように東西と南北の送電線が交わっているところからである。長岡市教育委員会は、東北電力に対し、周辺には周知の遺跡が多く、計画地に未周知の遺跡が存在する可能性が70%以上あることを伝えた。そして、協議の中で、未周知の遺跡が確認された場合、発掘調査に時間がかかり、変電所の建設工事の期間が大きく遅れることがあるので、計画地の変更を提案する。計画地の変更先として、本調査地より低地であり、未周知の遺跡が存在する可能性が低い本調査と西の滝谷町との間の水田を提示する。この案について、東北電力は内部で検討し、さらに用地の提供者などとも



第17図 調査地の位置及び周辺の遺跡群 (1/50000 長岡)

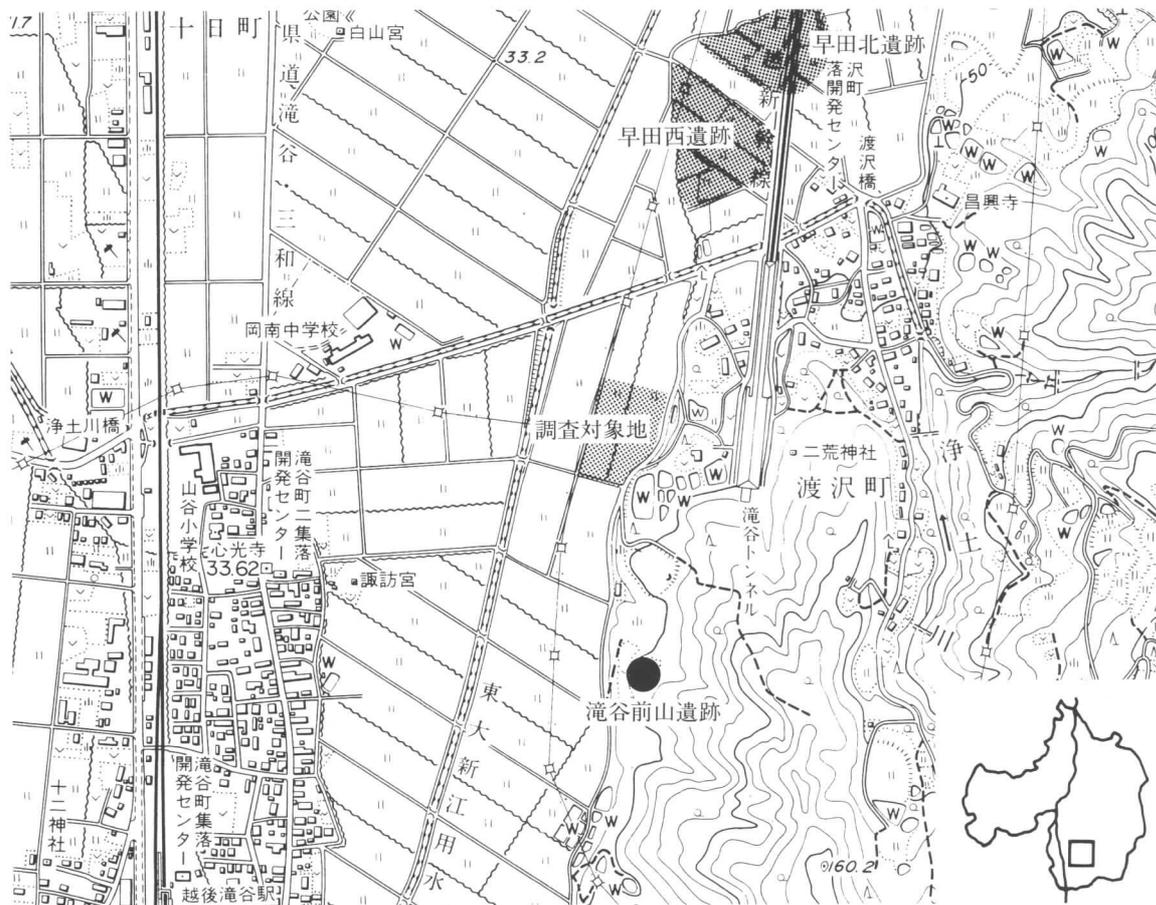
調査対象地 (■)

協議をし、再度協議を行った。東北電力で検討したところ、用地の確保がほぼ決まり、水田は休耕していること、送電線が交わる位置的な条件が最適であることから、本調査地以外に変電所の用地を変更することは事実上不可能であり、未周知の遺跡が存在しない可能性にかける、と言うものであった。これを受けた長岡市教育委員会は、遺跡の所在を確認する調査を行うが、土地所有者の同意については東北電力に協力をお願いする。そして、東北電力は確認調査の依頼を文書で長岡市教育委員会へ提出した。確認調査の実施日は、5月の連休明けから中道遺跡（栖吉町）の第3次発掘調査を控えているため、中道の調査の様子を見て決定することとした。

調査（6月18日） 確認調査は、中道遺跡の調査が軌道に乗った6月中旬に行った。調査の方法は、一反田に2カ所の発掘グリッドを原則として設定し、バックホーで発掘した。発掘グリッドの大きさは、2×4mである。確認調査のために発掘したグリッドは29カ所、面積は232㎡である。

調査の結果 調査は沖積地が丘陵に接する水田を対象に行った。地表下30cmから深いところで90cmで地山の暗青灰色粘土に達する。黒褐色土などの遺物包含層は確認されず、遺構・遺物ともに検出しない。

まとめ 変電所建設予定地での遺跡所在の確認調査は、29カ所のグリッドを発掘したが、遺構・遺物はなかった。調査地の北側の沖積地には早田北・西遺跡が、南の山には滝谷前山遺跡があり、建設予定地に未周知の遺跡が存在する可能性があったが、確認調査の結果から、予定地には遺跡は存在しないものと判断される。



第18図 調査地周辺の地形及び遺跡群（1/10000）



第19図 土手端地区調査グリッド図 (1/2500)

5 おわりに

遺跡の所在や内容等の確認を目的とした平成8年度の長岡市内遺跡発掘調査は、弥生時代の藤ヶ森遺跡、古墳時代の五斗田遺跡、縄文時代の三ノ輪遺跡、それに未周知の遺跡が存在する可能性がある開発予定地2カ所を対象に行った。藤ヶ森で長岡市内では初めて弥生時代の墳丘墓を確認し、長岡市の歴史に新しいページを加えることになった。また、発掘調査のデーターは、埋蔵文化財の保護について適切な方法を探る協議の資料として活用している。三ノ輪遺跡は、前の確認調査で出土した弥生時代中期の再葬墓は今次調査では確認されず、縄文時代中期の小規模な竪穴住居跡を1軒発掘した。三ノ輪が存在する関原丘陵には、大規模な馬高遺跡が存在しており、三ノ輪は馬高を拠点的な集落とした地域における一つの役割を担った遺跡であると考えられる。関原東部土地区画整理事業地内には、瓜割遺跡や塚群が存在しており、事業の進展に合わせて記録保存の発掘調査を行う予定である。

また、日越町本途地区や渡沢町土手端地区の調査では、開発予定地に遺跡が存在しないことを確認し、現場で事業者に伝え、開発計画が実施に移されている。

長岡市教育委員会は、今後とも開発計画に合わせて事前に確認調査を行い、適切な埋蔵文化財の保護計画を立てていきたいと考えている。

調 査 体 制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 大西厚生）
調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会生涯学習課）
調 査 員 鳥居美栄（長岡市教育委員会生涯学習課）
調査事務局 長岡市教育委員会生涯学習課（課長 廣川清喜）
調査作業員 長岡市民

調査に御指導・御協力をいただいた方々

県営ほ場整備事業山北第三地区協議会 関原東部土地区画整理組合 東北電力株式会社
医療法人立川メデカルセンター 山北土地改良区

長岡市内遺跡発掘調査報告書

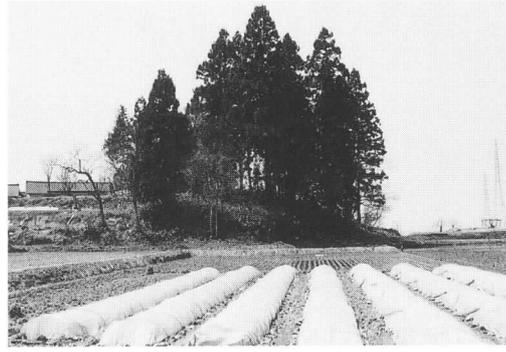
－藤ヶ森遺跡・五斗田遺跡・三ノ輪遺跡・本途地区・土手端地区－

平成9年3月28日印刷 平成9年3月31日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：株式会社 北越時報社



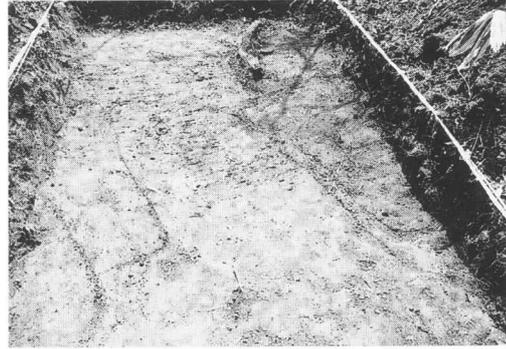
藤ヶ森・五斗田遺跡遠景（北から）



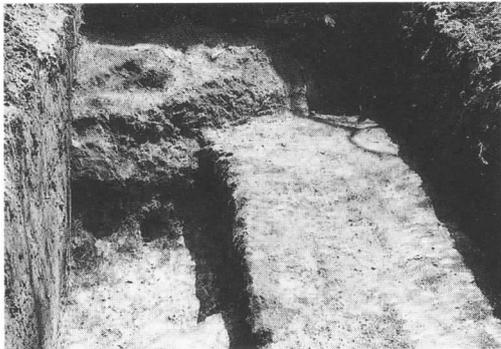
藤ヶ森墳丘墓遠景（東から）



藤ヶ森第1号墳丘墓近景



藤ヶ森第1号墳丘墓主体部の掘形確認



藤ヶ森第1号墳丘墓の周溝（21G）



藤ヶ森第2号墳丘墓



五斗田遺跡発掘風景



五斗田遺跡土師器出土状況（18G）

写真1 藤ヶ森・五斗田遺跡



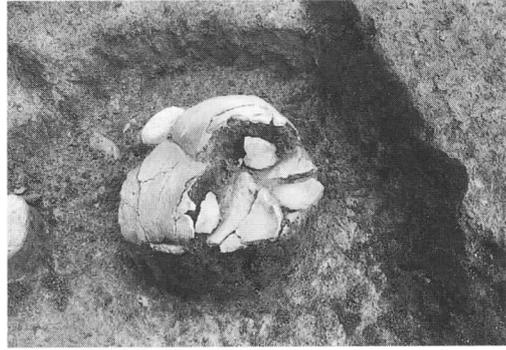
三ノ輪遺跡遠景（西から）



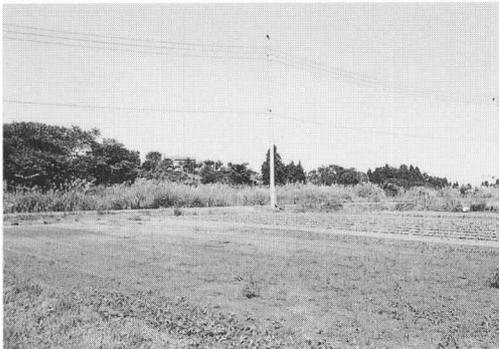
三ノ輪遺跡発掘調査地（道路法線内の調査）



三ノ輪遺跡竪穴住居跡



三ノ輪遺跡竪穴住居跡土器出土状況



本途地区調査地近景（東から）



本途地区発掘風景



土手端地区調査近景（北から）



土手端地区発掘風景

写真2 三ノ輪遺跡・本途地区・土手端地区

報告書抄録

ふりがな	ながおかしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	長岡市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	藤ヶ森遺跡・五斗田遺跡・三ノ輪遺跡・本途地区・土手端地区							
巻次数								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗・鳥居美栄							
調査機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940 新潟県長岡市幸町2-1-1 TEL 0258-39-2240							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうがもりいせき 藤ヶ森遺跡	ながおかし かめざきまち 長岡市亀崎町 あざとうがもり 字藤ヶ森	15202	297	37° 29' 06"	138° 55' 40"	19960416 ～ 0424	192	圃場整備
ごとだいせき 五斗田遺跡	ながおかし かめざきまち 長岡市亀崎町 あざごとだ 字五斗田	15202	0	37° 29' 06"	138° 55' 40"	19961015 ～ 1021	432	圃場整備
みのわいせき 三ノ輪遺跡	ながおかし ごたんだ 長岡市五反田 まちあざみのわ 町字三ノ輪	15202	43	37° 27' 19"	138° 46' 33"	19960917 ～ 0924	1,520	道路工事
ほんずちく 本途地区	ながおかし ひごしまち 長岡市日越町 あざほんず 字本途	15202	0	37° 26' 09"	138° 47' 06"	19960911	264	医療関連
どてはたちく 土手端地区	ながおかし わたざわまち 長岡市渡沢町 あざどてはた 字土手端	15202	0	37° 22' 21"	138° 50' 44"	19960618	232	変電所
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
藤ヶ森遺跡	墳丘墓	弥生時代	墳丘墓 2 基		弥生土器 170 石鏃 3			
五斗田遺跡	集落跡	古墳時代			土師器 160 須恵器 5			
三ノ輪遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1 基		縄文土器 670 打製石斧 1			
本途地区	未周知						遺跡でない	
土手端地区	未周知						遺跡でない	